

令和2年度「中国・樺太帰国者を知る集い」

樺太残留邦人に焦点

帰国者の苦勞と努力



日本語でスピーチをした樺太残留邦人 関幸恵さん

3月6日に令和2年度2回目の「中国・樺太帰国者を知る集い」が開催されました。今回は樺太残留邦人に焦点があてられ、一般市民を中心にした56名の参加者が残留の経緯を学び、残留邦人の声に耳を傾けました。

「集い」の前半では、滋賀県平和記念館から借りたビデオ「悲劇と労苦の地樺太」と、厚生労働省制作の「運命の軌跡」から樺太残留邦人の証言映像が上映され、終戦前後の樺太で何が起きたのか、また樺太にいた日本人がどのような運命をたどることになったかを学びました。中国でも樺太でも痛ましい悲劇が起こっていたこと、戦争で最も苦しむのは弱い立場にある人々であることを改めて痛感させられる内容でした。

「いままで知らなかった・・・」

後半は当センターの日本語教室を受講している樺太残留邦人の関幸恵さんが日本語でスピーチをしました。

関幸恵さんは、永住帰国した樺太残留邦人の中で最も若い1961年生まれ。樺太残留邦人の多くは、

朝鮮半島出身者と結婚し、樺太への残留を余儀なくされていますが、関さんのように、終戦後に日本人の両親のもとに生まれて、そのままその地に居住していた残留邦人もいます。

関さんは、一時帰国に参加して初めて日本に来たときのこと、漢字を覚えるのが大変なこと、子どもたちのことなどを、はっきりとした聞きとりやすい発音で語りました。

若い残留邦人はロシアの教育を受けて育ち、日本語を使う機会が少なかったため、帰国後、日本語の習得、文化習慣の違いなどで様々な苦勞があります。関さんのスピーチからもそのような苦勞と、同時に前向きな努力をうかがい知ることができました。

日本語教室の先生に見てもらいながら、時間をかけて一生懸命練習してきただけに、スピーチを終えた関さんは本当にうれしそうでした。参加者からも「若い帰国者がいることは知らなかった。生の声を聞いたことはよかった。もっと聞きたい」という声が寄せられました。

ほかにも「樺太残留邦人についてはほとんど情報がない。知らないことが多かったため、ありがたかった」、「帰国者が日本社会に適応することの大変さを感じた」などの感想がありました。

旭川市による生活支援講座

「ぐちの言い合いをしよう」



旭川では昨年2月以降、帰国者のみなさんが「集う」とが困難な状況とされ、もっぱら電話でのやり取りが中心でした。このような状況の中、市民のみなさんの日常生活も大きな変化を余儀なくされ、とりわけ帰国者の場合は情報の受け止め方も様々で、「何をどうすればよいのか?」、「どのように行動すればよいのか?」と相対迷い、混乱もありました。

一年以上顔を合わせていないこともあり、何とか帰国者だけでも集まって、昨年来の「コロナ禍」でたまっている「愚痴」の言い合いをしよう、との発想で、生活支援講座が開催されることになりました。

講座は4月21日に国際交流センターの共用会議室にて開かれ、帰国者6名、市の担当者を含む4名の支援者が参加しました。

久しぶりの顔、「元気してたかい」

一年三ヶ月ぶりの顔合わせ。マスク越しに互いの顔を見合わせて、「元気してたかい」、「どうしてた〜」と口々に挨拶し、尋ね合います。

最初に市の担当者から、マスク、消毒、3密を避けること等の感染予防、ワクチン接種についての説明があり、その後それぞれの近況報告が始まりました。

「チラシを見て、安いスーパーへ妻と散歩がてら歩いていく」「買い物に行くときは、20分くらい歩くので、よい運動になる」「テレビ



は主にニュース番組を見るが、スポーツや時代劇が楽しみ」など普段の生活のことや、「白内障の手術をして、よく見えるようになった」など健康に関する話、「帰国後40年経つが、まだ社会になじめない。自分の話し方や考え方が社会では受け入れられない、でも不自由なく生活できることがありがたい」という帰国者特有の悩み、「子どもや孫が遊びに来ないので寂しい」「海外にいる子どもに会いたい」など新型コロナウイルス感染拡大の中での悩みなどが話されました。

久しぶりに顔を見て、それぞれ思うことを話すことで、不安やストレスがいくらか和らいでいく様子が伺えました。また、今後の計画については川釣り、花見、旅行、温泉、電車旅行など、思い思いの案が出されました。帰国者のみなさんはボランティアのみなさんとも会いたいと言っており、6月頃には何らかの交流の機会をもてれば、と考えています。(寄稿 旭川市支援・相談員 門別秀保)

ともに新たな体験を



稚内では、令和2年度末も帰国者を対象とした行事がいくつか行われました。この新型コロナウイルス感染症拡大の状況の中、集まるのはほぼ同じ顔ぶれ、言ってみれば内輪でのこじんまりとした集まりとなりましたが、仲間とともに様々な体験するときとなりました。



健康増進プログラム

2月26日「コロナに負けない免疫力をつくろう」と題して健康運動教室が開催されました。樺太帰国者7名が参加し、イスに座って、タオルやボールを使って体をほぐす運動を行いました。またマスク生活のために呼吸が浅くなり、顔や口の筋肉が固まりやすくなっているため、顔の筋肉を動かす運動なども教えてもらいました。みなさん、体が軽くなり、すっきりとした表情で帰っていきました。

絵手紙で日本語と日本文化も

3月3日は「絵手紙教室」を開催しました。絵手紙は絵にひとこと添えて書くので、日本語の勉強にもなるし、日本の折々の行事についても知ることができるので、帰国者にはもってこいの体験だと言えます。この日はちょうどひな祭りということもあり、うぐいす餅や桜餅、ミニひな人形などの画材が用意され、ひな祭りについてのお話も聞くことができました。



お花好きには大好評

3月26日には初めての試みである「ハーバリウム体験教室」を開催しました。小瓶の中に様々な種類のプリザーブドフラワーをピンセットで入れ、竹串を使って花の位置を調整したら、オイルを注ぎます。泡が抜けたら蓋を閉め、リボンやシールで飾って完成。参加者の中にはお花が好きな人も多く、さっそく自分の家に飾ろうと持ち帰っていました。



～新年度が始まりました～

4月8日から新学期がスタートし、当センターも活気づいています。現在の新型コロナウイルス感染状況のために受講を控える人もいますが、久しぶりに顔を合わせた帰国者のみなさんは本当にうれしそう。やはり話題になるのは、新型コロナウイルスに関する事で、これから始まるワクチン接種の話をしていました。元気ですか、と声をかけると「元気じゃない!」と元気な返事。「教室が休みだったから元気じゃなかった。ここに来て、みんなに会うと元気になる。今はあまり外に出かけたりもしないから、家に三日もいれば退屈になる」。当センターを指して、託児所ならぬ託老所という言葉まで飛び出し、みなさん、楽しそうに笑っていました。いまだに予断を許さない感染状況ではありますが、帰国者のみなさんのように笑顔を忘れずに乗り越えていきたいと思えます。

退任のあいさつ

青山智恵 主査



4月から別の部署で違う仕事を担当することになりました。3年間、たいへんお世話になりました。せっかく、みなさんと

親しくなって、これからいろんなイベントを企画して一緒に体験させていただくつもりだったのに、とても残念です。

私の曾祖父・大叔母・伯母は戦前、樺太で生活していて戦後、山形県遊佐に引き揚げることができました。実は私の母も、小学校に入学する昭和21年4月には、遊佐から樺太に行く予定でした。そのため、おととしの夏、赤れんが庁舎にあった樺太関係資料館で、当時の「大泊一遊佐」のチッキ(手荷物預り証)を見た時には、感慨深いものがありました。また、センターで、樺太にあった当時の高等女学校の写真を見たりすると、大叔母らがかつて樺太で過ごした青春の日々がどんなものであったのか、考えたりしました。

担当する仕事は変わりましたが、センターが入っている建物の同じフロアにはありますので、見かけたら声をかけてくださいね。みなさん、くれぐれもお体を大切にしてください。

着任のあいさつ

鹿野牧子 主査



みなさん、こんにちは。この4月より中国帰国者支援・交流センターで勤務している鹿野牧子と申します。旭川

生まれなのですが、父の仕事の関係等で、札幌のほかに、道内のいろいろな所に住んだ経験があります。趣味は旅行です。多様性あふれるセンターで皆さんと共に交流や学ぶ機会を増やしていきたいと思えます。

どうぞよろしくお願いいたします。



6月・7月の行事

6月7日	DVD鑑賞会
6月16日	介護予防サロン(手稲前田)
6月27日	介護予防サロン(もみじ台)
7月18日	介護予防サロン(もみじ台)
7月19日	DVD鑑賞会
7月21日	介護予防サロン(手稲前田)